

授業評価を「授業の質向上」に活用するために

二つの事例を踏まえ、授業評価を授業の質向上に活用し、学びに向かう授業をつくるためのヒントを、事例と調査データから抽出して紹介する。

評価をいかに授業改善に結び付けるか

互見授業での気付きを組織での授業改善につなげる

二つの事例を通して、生徒が授業に参画するための手段として、授業評価の有効性を確認してきた。

富山県立高岡高校では、教師同士で授業を評価し合い、他の教師の授業も参考にしながら、自身の授業改善につなげていた。小誌2008年12月号で紹介した富山県立富山高校(*)の「互見授業」の記事に対する読者評価が非常に高かったことから、教師同士による授業の相互評価は関心の高い取り組みといえる。一方、形だけの取り組みになり、授業改善や教科指導力の向上に効果

があるのかを疑問視する声もある。

高岡高校では、「教科会」と「学年会」で互見授業での気付きを組織として共有し、授業の進度や難度を調整しながら、「伸ばしたい力」や「力を入れる分野」をどこにするかを話し合っていた。また、添削プリントによる学力把握や入試問題分析による指導力向上にも取り組み、一つひとつを「点」で終わらせず「線」にしている点も特徴だ。

更に充実した互見授業とするための工夫について、小誌08年12月号の読者アンケートの声から紹介する。「互見や観察で得られたものを印象的に整理するだけでなく、観察の事実に基づいた具体的手法の開発に結び付けることで、教師同士の学び

合いは更に深まると思う」(埼玉県)

生徒による授業評価で生徒の自己評価力も養う

広島県立尾道北高校では、生徒による授業評価を実施し、客観的なデータに基づく組織的な授業の改善を行っていた。

今回、小誌で実施した読者アンケートでは、「生徒による授業評価は授業の質向上に必要な」という質問に対して、「とても必要」「まあ必要」という回答が合計で9割以上あった。その理由として次のような意見が寄せられた。

「授業者の思いがそのまま学習者の思いにつながる場合がある。生徒がどう理解したか、感じたか。

生徒の反応に教師は常に敏感であるべきだと思う」(奈良県)

「教師が一方的に伝える、あるいは教師の求めるレベルに生徒を引き上げる授業もあるが、生徒が主体的に取り組み、思考を深める授業は、生徒と教師の共同作業である。その意味で、生徒がどう授業を評価するかは、授業改善への一要素だ」(滋賀県)

一方で、生徒による授業評価を「あまり必要ではない」と回答した理由には、次のような意見があった。「生徒はあくまで教えられる側であり、生徒による授業評価の絶対化はかえって効果を減じるように思う。支持率に一喜一憂する刹那主義に教育が陥る可能性のある諸刃の刃

*誌面は右記サイトをご参照ください <http://benesse.jp/berd/→HOME>>情報ライブラリ(高校版)

が、生徒の授業評価には内在しているように思われてならない」（愛知県）

生徒の要求にそのまま応える授業が果たして質の高い授業といえるのか、という指摘だ。

尾道北高校では、「分かりやすい授業」と「力が付く授業」の違いを意識しながら授業を組み立てている。生徒に力が付く授業は「難度が生徒にとって『ちょうど良い』授業ではなく、『やや難しい』授業」と捉えている。生徒が「自分に力が付く授業だ」と自身の学習をモニタリングできる力を持つていれば、たとえ難しい授業でも主体的に参画するようになる。授業評価は、そうした生徒の授業に対する意識を高めるためにも必要だと考えているようだ。

学びに向かう授業をつくるヒント
生徒が授業に主体的に参加できる場面をつくる

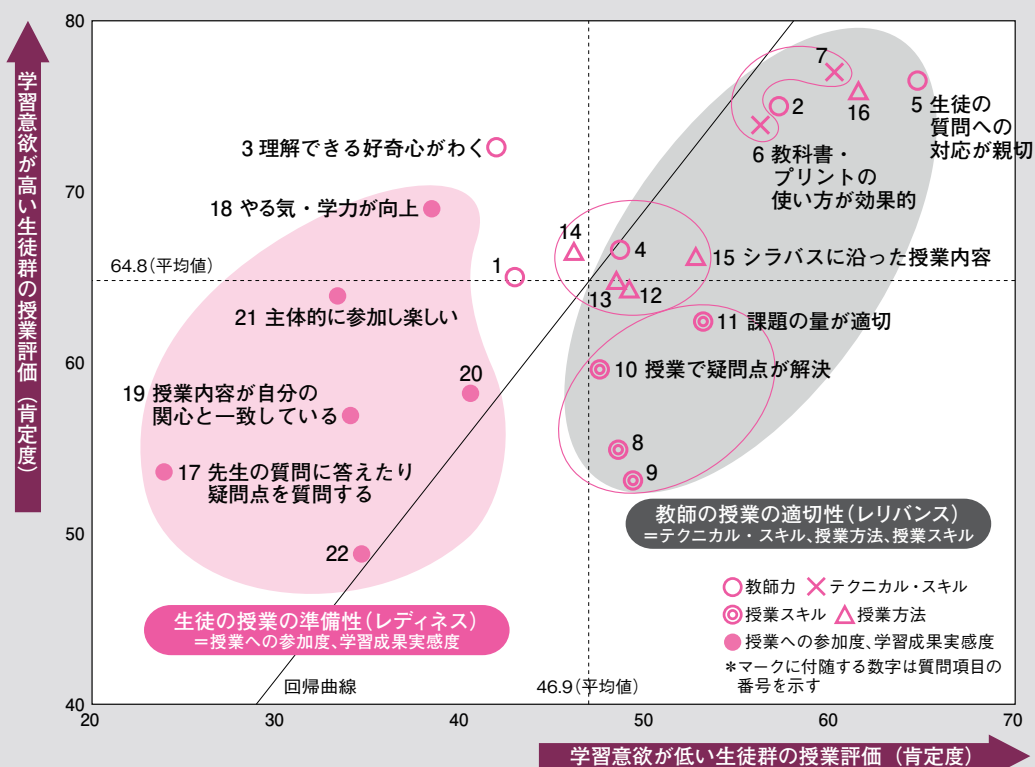
学びに向かう授業をつくるために、どのように授業を改善してい

ば良いのだろうか。弊社で実施した授業評価に関する調査結果を基に考えたい。

図は、学習意欲と授業評価の関係を散布図で示したものだ。縦軸は高い学習意欲を持つ生徒のみを抽出し、その生徒群の授業評価に関する質問項目の肯定度を示した。横軸は学習意欲の低い生徒群の肯定度を示した。例えば、「21 主体的に参加し楽しい」の肯定度は、意欲の高い生徒群は63・9、意欲の低い生徒群は33・3である。この数値は、回帰曲線（全体のすう勢値）よりも左側にあり、意欲の高い生徒に多く当てはまる傾向といえる。

全体的に「生徒の授業への参加度や学習成果の実感度」を示す項目は、回帰曲線よりも左側に集中し、一方、教師の授業スキルや授業方法を示す項目は右側に集中している。すなわち、授業で生徒の意欲を引き出すためには、授業の中で、生徒が主体的に参加できる場面などを意識的に用意することが必要だと言えるのではないか。

図 1年生4月時点での学習意欲と授業評価の関係性



出典／ Benesse 教育研究開発センター「学習活動の検証に関わる共同研究」(2010年)より抜粋